

## 被災家族の心を温める

津波で被災した釜石東中(平野憲校長、生徒187人)の生徒に届いた手描きの絵はがき。その1枚が新たな出会いと絆を生み、年の瀬に、ある被災家族の心を温めた。絵はがきを描いたのは、神戸市須磨区の滝川中・高(江本博明校長、生徒1300人)の中学生182人。その一人、3年の中尾友海君(14)に東中1年の佐藤桃香さん(13)が返事を出したことがきっかけで、中尾君ら同級生5人と担任の宇治孝夫教諭が12月28日、佐藤さん一家が暮らす桜木町仮設団地を訪れた。

## 絆はがきが結ぶ新たな絆

一行は、同団地の大震災発生時からこれまで和田泰佑自治会長の生活について話を聞いた。(68)と桃香さんの父・健さん(40)、母・和香子さん(40)、弟の繁君(11)らを迎えられ、津波の映像を見たあと震



中尾君(右から4人目)と桃香さん(同2人目)らは被災した鵜住居小などを訪れた

## 神戸市の滝川中・高から釜石東中へ

越し、新しいわが家での生活に胸を躍らせていた矢先の悪夢だった。

健さんと和香子さんは、和香子さんの父・忠さんが経営する片岸町の自動車整備会社で働いていたが、その会社も津波にのまれた。桃香さんは中尾君に宛てた返事に、感謝の気持ちや自分の被災体験などをつづつたという。

中尾君らは冬休みを利用してボランティア活動をしようと、他校の生徒と一緒に宮城県入り。多賀城市で床の泥出し作業などを行った翌日、同仮設団地を訪れた。初めて桃香さんと顔を合わせた中尾君は「実際に会えるとは思っていませんでした。元気そうで良かった」、桃香さんは「絵はがきをもらってすごく元気になった。直接お礼を言うことができうれしい」と喜んだ。

宇治教諭は、生徒たちが震災直後に神戸で行った街頭募金活動で集まった義援金を仮設で暮らす人たちのために役立ててもらいたいと大和田会長らに相談。

市復興推進本部へ届けられることを決め、この日、20万円を寄付した。

また、佐藤さん一家の案内で津波の被害が大きかった両石町や震災時、桃香さんが通っていた鵜住居小学校、津波の教訓を後世に伝えるため根浜海岸に建てられた石碑などを見て回った。

自身も数々の災害ボランティアに参加してきた宇治教諭は「教師

の自分にできることは、ボランティアの力を子どもたちに伝えていくこと。今回のつながりも大事にして、ずっと何らかの形で支援していきたい」と話した。

中尾君は絵はがきに剣道の絵とともに学級新聞のタイトル「One for all, All for one(ひとりみんなのために。みんなはひとり

のために)」と書いた。2009年に40周年を迎えた釜石青年会議所の理事長を務めた健さんは、同じ言葉をスローガンに掲げ活動。桃香さんからはがきを見せてもらった時、運命的な縁を感じたという健さんは「子どもたちからもう元気というのが一番勇気づけられる。がんばって会社を再建したい」と未来を見つめた。